

## 東アジアの将来像：共同体か、共異体か

東京大学東洋文化研究所 ウェブ ジェイスン

本発表では人文科学研究を行っている東アジアや欧米の研究者が、国際会議などの場で行われる学術交流において何を得、その経験をどのように生かし、どのように社会貢献に結びつけることが可能かについて検討した。

国家概念を乗り越えようとする比較文学や世界史学、東アジア学などが、従来は国家概念に支配されてきた研究の対象やテーマを広げることになるのは確かなことであろう。ところが、研究傾向としてのリージョナリズムと、一般市民が所属感情をいだくナショナリズムを超えた文化・歴史・価値観に基づいた共同体を構築する作業は、重なる部分があるにしても同じではない。果たして、その二つの作業はどのように繋がり、それによってどのような東アジアの将来像が理想として促進されているのであろうか。そして、人文科学研究における「地域性」を強調する国際共同研究や国際学会などの活動は、国際政治やあるいは国内の一般市民の認識とどのような関係にあるのであろうか。

ナショナリズム、リージョナリズム、共同体、その他関連する用語はどれも非常に複雑な空間意識や民族意識、歴史意識を内包する単語である。少なくとも、英語においてそれらを使って対話をする際には、用語の厳密な意味と微妙なニュアンスが人によって違うために誤解が生まれやすい。しかし、そうした研究者それぞれの個人的かつ細かな運用方法の違いよりも、地域によって大きく異なる意味内容を指していることの方が重大な問題である。つまり、リージョナリズムというその用語自体の定義は、リージョンによって異なるのである。たとえば ASEAN の国々が目標とするリージョナリズムと、ヨーロッパの国々が目標とするリージョナリズムの内容はけっして同じではない。それを混同して使用すれば、たいへんな誤解を招く。

研究者の責務は、東アジアでどのようなリージョナリズムが文学や政治、経済や外交などの様々な分野で目標とされているのかを問い続け、他のリージョンとの比較を通じてそれぞれの相違点を把握するようつとめることであると考えられる。